

# 浮世絵の美

その十六

## 各務章



へいこうじゃないか、あそこへ見えそうじゃ」  
右のような会話が書きつけ

ている。又室内の調度類にも気を配っているのが生活の中の男女という題材になっていて面白い。

さて、次にもう一人の絵師をあけて、枕絵の多様さについてみよう。

柳川重信。北斎の高弟の一人とされている。北斎の長女と結婚、一男に恵まれたが、離婚する。実家に戻った母子を北斎は世話したが、その子が長じて北斎に金銭的にも、精神的にも大変苦労をかけたと言われている。

重信は、弟子の中でも秀れた技量の持ち主で、浮世絵師の中でも上位一、二番にあげられたと伝えられている。しかし四十七歳で死亡。惜しまれた絵師である。

彼の「五ッ雁金」の春本について述べてみよう。

序文の一節に「……色に逢う夜の五ッ雁金、新手を出しうだけあって、絵も念入りに書き、彫りも刷りも共に仕上げが立派で最高の豪華本になっている。

のだろう。一人の男が、寝ころがってひと眠りしている。その隣で、男女が交合を始めている。一方では向こうの草むらで別の男女が、これも愛のちぎりを結んでいる。



女「あれ、あの子もおかしなぞぶりがだ」

男「はぎのはなより、このあながかくべつかくべつ」  
別の女「もっとくさのかげ

春画も、気分を和ませて、当時の茶人にも好まれたのではないだろうか。  
春信の絵には、菊の花や松の木等、周囲の草花等を描い

浮世絵の考案者とされる鈴木春信について、今少し述べてみたい。

美人画を得意とした春信の枕絵は、優雅で必ずしも国芳や歌麿のように色っぽくはないが、可憐な少女らしさが匂って捨てがたい魅力がある。

何となく生娘らしさが残っている。しかしだからと言って全くの娘というのではなく、その細ぶりの肢体に、かくれた色気があるのを好む粋人もいたのであろう。彼の浮世絵には後世に残る佳作が多いのも、その証拠である。

「△様妻鑑」から、更に少し紹介してみよう。春信の描く女のモデルがお仙という茶屋の娘であった事が資料に残っている。

枕絵の女の顔が、殆ど同じなのは、そのせいと思われるが、それ程の美人とも思えな

次の漢詩にそえて野の草むらでの男女の出会いが描かれている。

暁の露に鹿鳴いて  
花始めて発く  
百般攀ぢる  
一時の情

明け方の露をふみわけて、鹿が鳴いて、萩の花が、はじめで開いている。私は何度もうりかえし、興にまかせて、この花の枝を折りとったのである(男女交情を言っている)。

夜明けの説明があるのも少しおかしいが、絵を見るかぎり昼間の風景となっている。秋の野遊びに行き、ゴザを敷いて、酒や弁当を楽しんだ

この本は特別註文のものだったようで、金に糸目をかけない粋人や金持ちがその買い手だった。だから思い切った工夫をこらし、豪華に仕上げたとされている。

ここに一枚の絵がある。両国の橋の上から若い娘が欄干をのり越えて、今まさに川に飛び込むと、身を躍らせている図（右頁図参照）である。たまたま下の川に舟が一艘、若い舟頭が櫂を漕ぎながら、上を向くと、女のとびおりの姿、おい待てよ、と右手を上へのばして、受けとめよととする姿。実にその瞬間の動きを美事に描いていてすばらしい。

橋の上では数人の人間が笛や太鼓で、人探しをしている図との説明がある。夕暮れ近い風景であろうか。

娘は、恋仲の男が、他の女と結婚すると聞いて、男への面当てか、口惜しさからか、「南無阿弥陀仏と唱えながら



の身投げである。その顔立ちの美しさ、その美しさの中に引き締まった目もと口もと、風になびく赤い湯文字と黒帯に着物の色あい。実に美事な構図であり色彩である。



命拾いた娘と若い舟頭はどうなったのか。気が失った娘を川岸に舟をつけて介抱していた舟頭が、よく見るとまだ手つかずの生娘らしい。うむを言わず乗

りかかると。娘は目を覚まして、両手でかばって、さげよと

する。

その時、月が出て、見合わせる時、どちらも若く気の合う男女。そこで互いにしっかりと抱き合せて、めでたしめでたし。こんな物語の結末である。或いはそうあったが良いと絵師が考へての構図だろう。これも、あくまでも田野辺

富蔵氏の資料から引き出した解説に味をつけて述べたものであり、色彩豊かな版画の内容を紹介したもので、私の想像も加えてのラフシーンだ。

もう一枚の絵がある。北斎も描いているが、年増の女房と丁稚の密会図。或いは後家を通すつもりで未亡人が一人の美少年を見そめて、色の道に又溺れていく。こんな構図が描かれていて、いかにも江戸の人情の機微を突いた絵物語である。大衆が好む内容は昔も今も変わらない。しかし

昨今の週刊誌は芸能人の裏話ばかりで、逢い引きの盗み撮り写真を掲載している等は、江戸の浮世絵師の美意識に比べたら、月とスッポンで見るに耐えない俗っぽさである。編集子達も再考すべきであろう。

重信の一枚にも、女房と丁稚の出会いがある。仏壇の前の二人。どちらが先に抱きついたか分からないが、「たれぞくるとわるうございます、といなながら口と口とを……あれもつとなきいえ

……」（上図参照）と女房が仏の前でのご乱行。絵の中の兩人のからみは品があり、物音もせずおっとり描かれていて、みていてもあ

きがこないのがいい。重信の絵の背景には、家中の生活の調度類が、細かく精密に描かれているのも特徴である。戸障子や柱と人口の戸や上がりがまの板張り。壁にかけた小物。箱枕、懐紙の類。

又川舟の図には葦のしげみ、川土手の石垣の細かい描写。墓場の野草の描き方もなかなかのもので色彩も季節に合わせて描いている。

今まで多くの春画を見てきた結果。夫々絵師が描く、美人画、役者絵、風景画に比べても、この種の春画の方に、相当の力を入れて熱心に制作したのではないかと、思うようになった。それ程に春画錦絵の質の高さに感動しているのである。絵師にとって枕絵春画とは何であったのだろうか。

＝つづく＝